

聖霊降臨節第7主日 説教 「迷える小羊」要旨
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2023年7月9日

マタイによる福音書 18:10-14

既にご案内のように、先週の水、木と幼稚園の一泊保育が行われ、皆さんのお祈りとお支えによって、今年も無事全日程を終えることが許されました。ありがとうございました。ところで、この一泊保育ですが、はじめて親元を離れる子どもたちにとっても、またその保護者にとっても、それぞれにとって成長のための良い機会となっています。そして、それが許されているのは、引率する職員たちへの信頼あってこそのものでありますが、しかし、だからといって、手放しですべてを任せられるものでもありません。子どもも保護者も職員も、一つを選ぶという大きな決断をなし、この一泊保育に臨むわけですから、信頼があるとは言え、それはとても勇気のいることです。特に、小さな子どもにとっては初めてのことで、経験がないだけに想像がつかず、それゆえ、一歩前に出ることは相当に勇気のいることです。ですから、励まし、その背中を押してあげるのももちろんのことですが、ただ、子どもも親も、それぞれが前に一歩踏み出すことができたのは、ここに至るまでの歩みを職員一人一人と共にしてきたからです。

ただ、残念なことに子どもたち全員が参加できたわけではありません。前日の午後に発熱したりと、体調が優れず参加できない子どもが6名もおりました。それゆえ、子どもも親も職員も、この日のために準備に準備を重ねてもきましたので、この不参加という決断は、それぞれにとってとても辛い決断となりました。しかも、一泊保育は、今は、在園中、たった一回の出来事です。それゆえ、参加できない者がいたことは、この後、子どもたち、親たちの間に埋めることのできない溝を生じさせるやもしれません。特に、今年は6名の子どもたちが参加できなかったわけですから、なおさらのことです。それゆえ、行った子どもと行けなかった子どもとの会話一つ取っても気を遣わなければなりませんし、かといって、余り気を遣いすぎると、行った子どもにも変な負い目を負わせることにもなるのでしょうか。ただ、ここでこのような話ができるのは、そうならないとの確信があるか

らです。それは、年長組の担任がしっかりと保護者への対応をしてくれたからです。またそれだけではありません。職員一人ひとりが子どもたちと保護者と、日頃からしっかりとコミュニケーションをとっていることを実際に見て知っているからです。

ただ、今お伝えしたことからも分かるように、一つを選ぶという決断、一つを選ばざるを得ないという決断の中には、勇気だけでなく、本人の意思に反する残酷な一面が隠されてもいるのです。それゆえ、この、突如として現れるにもものによって、子どもたちもまた、人生の厳しさ、残酷な一面を学ぶこととなります。私にも身に覚えがあるのですが、幼い頃に負ったそうした傷はいつまでもよく覚えているものです。ですから、そういうものとは極力関わりたくない、そう思うのはある意味で仕方ないことでもあるのでしょうか。ただ、残念なことに、時折見え隠れする人生のそうした残酷な一面と、まったく関わらずに一生を過ごせる者はまず一人もおられません。まただから、人生をより良く歩むために、私たちは、勇気を振り絞って一つを選び、前に一歩を踏み出す決断をするのですが、では、この「より良く」と言った場合の「より良く」とはどういうことなのでしょうか。

そこで、思うことは、より良い人生を歩むために努力を怠らないということでもありますが、それは、失敗を恐れず、勇気をもって前へと一歩を踏み出せば、仮に失敗したとしても、それを土台として人生をより豊かなものすることができる、私たちの多くはそう考えているからです。しかし、そう思ったとしても、その言葉通りに人生を歩めるわけではありません。それは、その身に負うた苦しみが必ず良い実を結ぶとは、誰にも確証できることではないからです。私たちが人生に迷い、思い悩むのはそのためでもあります。従って、迷い悩む日々を過ごす私たちにとって、この日の御言葉はそういう意味で大きな慰めと励ましを与える御言葉であると、私たちの多くがそのように受け止めてきたのはそれゆえのことです。では、その私たちにイエス様は何を仰ろうとしているのか。そこで

先ず語ったことが「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい」というこの一言でした。

それは、先週に引き続いて、私たちが目の前に置かれた一人の子どもを見つめているからです。そして、この目の前の子どもとは、イエス様にとっては私たち一人ひとりのことでもあります。なぜなら、イエス様が「一体誰が天の国で一番偉いのか」と無邪気に尋ねる弟子たちに対し、その目の前に一人の子ども立たせ、「心を入れ替えて子どもようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」と、こう仰ったように、主の御前に立つ幼子のようにこの日の御言葉に聞いているのが私たちであるからです。ですから、この日、イエス様が「これらの小さな者を一人も軽んじないように気をつけなさい」と仰ることは、人をも、また自分自身をも軽んじてはならないと、イエス様がこう仰っているということです。それは、私たち一人ひとりが、それだけ神様に大事に思われている一人ひとりであるからです。しかも、神様のこの思いは、大事するしないといった、私たちが考える、そうした社会通念を遙かに超えたものです。それは、「言うておくが」と、つまり、「いいか、耳の穴を叩き叩いてよく聞け」と、こう、イエス様がわざわざ断りを入れているように、私たちに向けられた神様の思いがいかに深く、広く、大きいかがここから分かるからです。そして、それは、捉えどころのないものではなく、より具体的なものです。そして、それを私たちに伝えるため、イエス様の仰ったことが「彼らの天使たちは天でいつも私の天の父の御顔を仰いでいるのである」というこの一言でありました。

ところで、天使の存在というものを、皆さんは普段どこまで意識しているのでしょうか。天使と悪魔とを並べた場合、心の中で大きな位置を占めているのは、もしかしたら天使ではなくて悪魔ということはないでしょうか。それは、天使についてはどこか現実味を欠いたもののように考えているからです。けれども、この日の御言葉にもあるように、私たちの信仰は、天使なくして成り立つものではありません。なぜなら、天使の存在と働きなくして、イエス様の物語は始まることも終わることもなかったからです。イエス様の誕生に際して、乙女マ

リアの前に現れたのも天使であり、また、イエス様の甦りに際しても、マグダラのマリアに甦りの事実を最初に伝えたのも、やはり天使であったからです。このように天使の働きは大きく、しかも、私たち一人ひとりには、その私たちを守る天使が共にいて、父なる神様の御顔を仰ぎながら、私たちの命を守り支え導いてると、イエス様はこう力強く語ってもおられるのです。

ところが、私たちプロテスタント教会に属する者は、悪魔と比べこの天使のことを刺身のつま程度にしか考えていないということはないでしょうか。それは、カトリックと違って私たちには、守護聖人、守護天使と言われているものに頼る習慣、習俗はないからです。むしろ、そういうものと積極的に距離を置ききたのが私たちプロテスタント教会でもありました。それは、神様の恵みを重視した結果、個人の信仰の確立、成長というところに重きを置くようになったからです。私たちが天使だけを取り上げ、殊更何かを語ることができないのはそのためです。それはまた、天使は神に近い存在でありつつも、私たちと同じ被造物に過ぎないものでもあるからです。つまり、信仰の対象たり得ないということです。私たちが天使の存在とその働きを強調されることに、正直、抵抗を感じるのはそのためでもあります。ただ、それをカトリック的と称し、単純に不信仰と言い切ることはいかがなものかとも思うのです。なぜなら、今日の御言葉に聞いていっても明らかかなように、天使の働きなくして、私たちの信仰が信仰とされることはないからです。それゆえ、イエス様がそう仰っているわけですから、この「99匹の羊と1匹の羊」の譬え話は、天使という存在なくして理解できるものではなく、それゆえ、ここから生み出された「迷える小羊」というこの言葉の理解も同じです。

ところで、この「迷える小羊」という言葉ですが、かつては社会通念のように社会に広く定着していたように思います。ところが、定着したかのように見えた「迷える小羊」というこの言葉を、最近では、ほとんど耳にすることがないように思うのです。これについては、皆さんはどうお思いでしょうか。少なくなった理由が迷い悩む人がそれだけ少なくなってきたならいいのですが、実際はそうではありません。それ

ゆえ、かつてのようにこの言葉を耳にする機会が減ったというのが少し気がかりではあるのですが、では、そうなったのはどうしてなのでしょう。こうして誰よりも近くこの御言葉に接しているのが私たちであるわけですから、その責任の一端が私たちにあるのは間違いありません。けれども、この重荷を私たちに背負わせようとして、この御言葉が語られているわけでもありません。自戒を込めて、自らを振り返るというくらいならまだしも、自分をいくら責めたところで、それで何かが変わるわけではないからです。それよりも、「迷える小羊」というこの言葉が定着していった背景を考えてみたいのです。

迷える小羊という言葉が社会通念として使われるようになったのは、私たちキリスト教会が迷い悩む人々と長きにわたって共に歩んだ歴史があるからです。そして、それは、今に至るまで変わりなく続けられていることであり、これからも間違いなく続けられるものです。ただ、かつてと比べ、教会に勢いがなくなってきたのも確かなことです。どの教会もそうなのですが、かつてのように若い力に満ちあふれているわけではありません。そのため、キリスト教主義学校も、教会附属幼稚園も、その多くがクリスチャン職員を招くことができず、教職員の大半がノンクリスチャンであるという話は珍しい話ではありません。ですから、1匹を探し求めるところか、99匹がじっとまとまっているのも難しい状況にあるとも言えるのですが、けれども、そこでまた思うのです。そもそものところで、このイエス様の譬え話は、1匹か、それとも99匹かといった、そういうことが言われているのか、と。そして、それは、私たちがいずれを選択し、そのために何が必要か、何をしなければならぬのかといった、つまり、信仰の覚醒を意図的に促すために、この御言葉が使われることが多かったのでは、とそう思うからです。

ただ、これまでは実際に多くの結果を残し、そして、その結果が今であることを思いますと、今日の御言葉に聞いていくなから、天使の執り成しゆえに聖霊の働きが与えられ、その結果として今があるのは間違いありません。では、現状はどうか、かつてのような勢いが無いのは、天使が弱って、それに伴い聖霊の働きも弱まったか

らなのでしょう。それだけではありません。恵みの場に生かされているということ、ここ数週間繰り返し申し上げたわけですが、この恵みの場ということも、同じように誤解されやすい言葉だとも思うのです。それは、とても耳障りのいい言葉だからです。ですから、誤解されるその根っ子はそういう意味で二つとも同じです。ある種の信仰の力強さだけを強調することは、分かりやすいものだからです。

ただ、もちろん、やる気を与え、多くの人々の心を引きつけることは大事なことです。多くの人々が主のものとしたのは、十二人の弟子たちはじめ、代々の聖徒たちの働きがあってこそのものであるからです。ですから、やる気、本気、元気は、伝道のモチベーションを高める上で大切なものでもあるのでしょうか。けれども、やる気のない者、本気になれない者、元気のない者、これらの者を無理矢理やる気にさせ、本気にさせ、元気にさせることが、イエス様がここで仰る、1匹の小羊を探し求めるということなのでしょう。もちろん、イザヤ書の40章に「走っても弱ることなく、歩いても疲れぬ」とあるように、福音にそういう力があるのは間違いありません。けれども、私たちに求められていることは、通販の健康食品の広告のような、ある一点だけを強調し、売上を上げることなのでしょう。そうであれば、足の痛みも取れず、また体重も減らなければ、長く続くこともありません。その人のことを重んじようと思っていよいよやったけど続かなかったというのでは、それは軽んじるのと何が違うのでしょうか。また、その反対に、何も働きかけずに放っておくというのはどうでしょう。個人を尊重しているようでいて実は相手にもしていない、そう言うことになりはしないのでしょうか。

イエス様が軽んじるな、躓かせるなど仰っていることは、下にも置かないもてなしをすることでもなく、また、自己責任と称し、我関せずを決めつけることでもありません。私たちはこうして恵みの場にながらも、悩むことはあるし、迷うこともあるのです。それだけではありません。神様のこともイエス様のことも、まったく信じられなくなることもあるし、また、信じていたとしても、他のものに心動かされてしまうこともあるのです。まさに、私たち自身

が「迷える小羊」であるのです。ですから、イエス様が躓かせない、軽んじないと仰っていることは、神様とイエス様を信じる私たちが、先ずは自分自身の不信仰、そうした不誠実さと正直に向き合うところから始まるのではないのでしょうか。そして、その上で私たちは何を語るのか、それは、もちろん、信仰の自慢話をするでもなく、また、信仰に対し斜に構えることでもありません。ただ、すべての者が語るべき言葉を持っているわけではありません。ですから、もし語る言葉がなければどうすればいいのか。語るべき相手のその傍らに立って、語る言葉が見つかるまで、目の前の子どもとも、また、自分自身とも、言葉が与えられるまでじっと待ち続けることです。つまり、迷える小羊というこの言葉が社会通念としてこの国の中に定着するようになったのは、私たちがそういう余白を大事にしてきたからで、つまりは、分かろうとしても分からないというこの気持ちを大事にしたからこそ、聖霊が働き、この私たちを通して、この「迷える小羊」という人間の本质に関わるこの言葉が日本中に広がっていったと、私はそう思うのです。そして、このことはまた、遠藤周作が「沼地のようだ」と言った私たちが生きるこの国で、先達の多くが恵みの場に生かされていると信じ、神様からの恵みを多くの人々と分かち合ってきたからでもありました。

それは、恵みの場に生きる者と神様とがとても近い関係にあるからです。ただし、神様と私たちとの距離がそれで完全になくなったわけではありません。神様と私たちとの間に天使がいるとイエス様が仰っているのは、そこに間違いなく断絶があるからです。そして、この断絶をまさに味わったのが一泊保育に参加できなかった子どもたちでもありました。そして、年長組の担任がその子どもたちと親に語ったことが「行けないことも子どもの学びに繋がる」ということでありますが、ただ、そう言われ、幼い子どもが直ちにその言葉のすべてを理解できるわけではありません。子どもが感じたそのストレスは言葉だけですぐに解消されるものではないからです。それゆえ、私がそうであるように生涯記憶から失われることでもありません。けれども、99匹とだけイエス様と一緒にいるのではなく、迷える子羊である私たちとのことをも探し求

め、一緒にいてくださってもいるのです。それは、私たちのことをこうしてこの恵みの場に生かそうとしているからです。

このように、恵みの場に私たちが生かされているということは、物事が全て信仰ゆえに上手くいくということではありません。うまくいってもいかなくても、どこまでもどこまでイエス様が共にいてくださっているということであり、天使はそのために私たちと共にある、むしろ、天使が私たちと共にあればこそ、私たちは神様と共にある現実をいずれ必ずどこかで理解できる、イエス様はそう私たちに伝えてくれているのです。

一泊保育に行ったか行かなかったか、私たちが99匹の羊か、それとも1匹の羊なのか、恵みの場に生かされている私たちにとって、一番大事なことはそのいずれかということではありません。ただ、私たちは、このいずれかというところで、どうしても安心を得ようとしてしまうのです。私たちが迷い、悩みを大きくするのはそのためでもあります。けれども、そこで私たちが迷い、悩みを深めるからこそ、私たちは知るのである。この私と、この私たちと、イエス様はどこまでもどこまでも共にいてくださっていると。ですから、年長組の担任が「それもいい学びの機会となるから」とそう言って、保護者が安心できたのは、年長組の担任が、自分が何ものであり、自分がどこに生かされているかを知っていたからです。そして、それが恵みの場に生かされているということでもありますが、ですから、キリスト教教育の目指すところは、無批判に「信じる」と口にすることはできません。恵みの場に生かされている私たちのことを、神様は天使を遣ってまで探し求め、その愛の中に置こうとされている、伝道の成果として「迷える小羊」という言葉が社会に定着したのは、神様の愛の中に生きる、そういう私たちクリスチャンの日々の暮らしがあったからです。そして、この暮らしは今もこの私たちによって続けられているものなのです。ですから、それを続けるためにも、「我信ず、信仰なき我を救いたまえ」と、このことを正直に、そして、誠実に、イエス様の御前にあって告白する私たちでありたいと思いません。祈りましょう。